

敗戦と世直し

—^{じう}璽宇の千年王国思想と運動— (1)

対 馬 路 人

はじめに

敗戦直後の日本に「雨後の筍のように」とか、「神のラッシュアワー」と呼ばれるような新宗教設立のブームが起ったことはよく知られている。その時期、台頭した新宗教のなかで、特に早くから社会的に脚光を浴びたものとして、天才棋士の呉清源や大横綱の双葉山を従えて評判となった「璽光尊」（璽宇）と、街頭でのエクスタシー状態になっての「無我の舞」で有名になった「踊る宗教」（天照皇大神宮教）がある。これらの集団はいずれも当初、終戦直後の社会的混乱、精神的動揺を反映した異常心理現象として片づけられることが多かった。しかし、少し立ちいって検討すると、これらの運動はむしろ戦前期の大本あたりからつらなる土着主義的な世直し（立替え立直し、千年王国主義）運動の系譜のなかに位置づけられるべき、「硬派」の社会変革型宗教運動であることがわかってくる¹⁾。本稿はこのうち璽宇を取り上げて、その思想と運動が近代日本の土着主義的な宗教的世直し運動の流れのなかで、どのように特質や意義をもっているのかを検討せんとするものである。そしてこの場合、特に着目したいと思っているのは、これが戦後派の運動として、敗戦という現実をどのように受けとめ、それをふまえてどのような新たな世直しの構想を打出し、運動を展開

1) こうした運動の流れを概観したものとして、例えば拙稿「終末預言宗教の系譜—日本の新宗教を中心として—」（『真理と創造』No. 24、1985、pp. 94-106）を参照のこと。

していったのかという点であり、更に言うなら、そのなかでどれだけ土着主義に付着していた自民族中心主義が相対化され、どれだけ普遍主義的なものへの脱皮がなされていったかという点である。

ところで、こうした観点からの璽宇の思想と運動のパターンの分析に先立って、本稿ではまず璽宇運動史の再構成を試みる。これは後半部を理解しやすくするためだけにおこなうのではない。それ自体本稿の目的の一つでもある。というのはこれまでのところ璽宇に関しては、その運動史の全体をカバーするような信頼に足る通史的記述がほとんどないからである¹⁾。璽宇の母体となった篁道大教の実体や、後に璽光尊となる長岡良子の天啓以前の生活史など、なお不明な点が多く残されてはいるが、今回の調査である程度明らかになった点もいくつかあり、この時点でそうした点を含めて璽宇の運動史全体を整理しておくことは、それなりに意味があるといえよう。

I 運動の展開過程

1. 第Ⅰ期

〔運動史の時期区分〕

璽宇と呼ばれる宗教的世直し運動は昭和16年に発足し、以来今日まで存続しているが、運動の内実からみて、その歴史はおおよそ3期に分けることができるように思われる。これを仮に、第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅲ期とすると、第Ⅰ期は昭和20年5月頃までの時期で、峰村恭平という人物をリーダーとした期間にあたる。ところが上記時期に峰村が離脱し、璽宇は長岡良子（のちの璽光尊）という人物に引継がれる。この指導者の交代とともに璽宇の運動は第Ⅱ期に入る。

この第Ⅱ期は、おおよそ、昭和23年末頃までとみられるが、璽宇の運動史のなかで最も世直し運動が盛上がりを見せた時期にあたる。要人や社会への大胆な働きかけが試みられ、またそのために、逆に社会からさまざまな統制をうけ

1) 今のところ、もっともまともまわっていると思われるものとしては、梅原正紀「璽宇—ある天皇主義者の悲劇」（出口栄二他『新宗教の世界Ⅳ』大蔵出版、1978、pp.148-186）をあげることができよう。しかし、これも通史的記述として十分なもの、全面的に信頼を置けるものとは言えない。

ることになった。思想の面でも、独自の世直し思想が確立された時期にあたる。したがって本稿でも、この時期の璽字の運動と思想の分析に特に力を注ぐ。

第Ⅲ期は昭和24年頃から今日に至るまでの期間である。この間も世直しの運動理念は保持され続けているが、そのあり方が内向的なものへと変化したという点で、第Ⅱ期の運動とは区別されよう。以下、こうした時期区分にしたがって、運動の展開過程を追うことにする。

〔篁道大教から璽字へ〕

璽字は、すでに述べたように、昭和16年、戸寿鉦業なる鉦山開発業などを手がけていた事業家で、神道系の行者でもあった峰村恭平を中心として、東京で結成された。しかしそれは、その時突如新たに出現したわけではなく、もともと峰村が主宰していた篁道大教なる宗教サークルを母胎として誕生したのである。

この篁道大教は、峰村が靈感豊かであった義弟の峰村三夫と組んで興した神道系の宗教サークルであった。後の璽字の「神示」によると、皇道が天皇の統治の道を意味するのに対し、篁道は国民が臣民として天皇に奉仕する道を意味するとされており、その教えの詳細はわかっていないが、天皇への帰一、奉仕を強調する運動であったと思われる。神殿には天照皇大神が祀られていた。また、ここでは事業活動と宗教活動はけっして別物とは考えられていなかった。「教業一致」が唱えられ、両者の一体化がはかられていた。例えば、巫者の役割を担っていた峰村三夫の天啓を「御神示」として文字にあらわし、それにもとづいて鉦山開発をおこなうといったことがなされていた。また鉦山開発自体も、その宗教活動の経済的基盤を固めるのに役立つものであると同時に、世直しを担う神の代行者を自認していた峰村にとっては救世的意義をもつものと考えられていた。当時日本は、大陸に戦火をひろげつつあり、地下鉦物資源の確保は重要な国家的課題とされていたからである。

この篁道大教が昭和16年に璽字と名称を変更するわけであるが、これと相前後して、別の宗教グループがこのサークルに合流するといった事態が生じた。そのグループは、かつて大本にかかわり、当時善隣協会という東洋人留学生のための学校の理事長をしていた大島豊（のちの東洋大学学長）、かつて大本の支

援のもとに菊花会という心靈研究団体を主宰していた小田秀人、中国の宗教＝慈善団体の世界紅卍字会道院の信者であった棋士の呉清源といった人々からなっていた。

世界紅卍字会道院とは1921（大正10）年に中国の済南で生まれた新しい宗教団体で、中国式の巫儀（扶乩）を通して得られる「壇訓」と呼ばれる託宣にもとづき、慈善活動や宗教活動をおこなう団体である。その歴史は浅いが、政治家や富豪など有力者の信者を多く擁し、また、慈善活動により民衆の人気も高く、当時の中国・満州ではかなり有力な宗教団体の一つとなっていた¹⁾。また、この団体は世界の五大宗教（儒、仏、道、キリスト、イスラム）が共通の源から発したことを主張し（五教同源）、諸宗教の相互寛容や協調をも説いていた。こうしたいき方が、やはり諸宗教の一致による世界平和の実現を説いていた当時の大本と共鳴しあい、大正12年両団体のあいだに提携関係が成立している²⁾。この関係は、大本の聖師出口王仁三郎および後継者の出口日出磨による中国大陸への渡航や、紅卍字会道院による日本への佈道団派遣を通して一層深まり、両団体のあいだにはかなり密接な交流関係が形成された。大島や小田はいずれも昭和4年の佈道団来日の際に、その信者となり、その正式メンバーとしての名前（道名）を与えられている。

しかしその後、昭和10年にいわゆる第二次大本教事件が発生し、大本が解散させられてしまったので、日本の紅卍字会道院の信者と大陸の紅卍字会道院との関係が途絶えてしまうことになった。そこで大島や小田はなんとか大陸の紅卍字会道院との交流関係を回復すべく、大陸の道院で正式に修行した呉清源を誘って、昭和13年頃より、その日本支部の設立運動を始めた。しかしこれは結局、日本政府の許可を得ることができなかった。やむをえず、世界紅卍字会道

- 1) 当時の世界紅卍字会道院の概要については『世界紅卍字会道院の実態』興亜宗教協会、1941、酒井忠夫『近代支那に於ける宗教結社の研究』東亜研究所、1944、（1985年岡本書店より復刊）を参照のこと。なお、ここでは慈善活動を世界紅卍字会が、宗教活動を道院が担当するものとされていた。
- 2) 大本と紅卍字会道院の提携や交流については、拙稿「新宗教における『万教同根』思想と宗教協力運動の展開」（中央学術研究所編『宗教間の協調と葛藤』佼成出版社、1989、pp. 275-288）を参照のこと。

院日本後援会というかたちで活動を開始したが、これも日中関係の悪化により、大陸の団体との実質的な交流が困難となり、結局、昭和15年これも解散ということになった。しかし、将来における活動の再開のことも考え、紅卍字会道院の主宰神格「至聖先天老祖」を祀る場所を確保する必要があった。この頃すでに紅卍字グループと峰村の篁道大教の間には、場所が近接しており、しかも神示の方法に類似性があるなど、宗教活動の面でも似た点があったことから、信者間には交流がみられていた。そこで紅卍字グループは「至聖先天老祖」を篁道大教に祀ってもらうことになった。こうして、峰村の篁道大教に、活動の場を失った旧世界紅卍字会道院グループが合流するかたちになったのである¹⁾。なかでも小田秀人や呉清源はこちらの団体にしだいに深くかかわるようになる。小田は峰村の砂鉄採掘事業のための資金調達に奔走するようになる。また呉は峰村の紹介で、その親戚にあたる中原健一の長女和子（後の璽宇で神巫役をつとめる）と結婚することになる。紅卍字グループのこうした合流があったのち、篁道大教は璽宇と名称変更する。

さて、璽宇と名称を改めてからも、そこでは従前のように、神示による信仰指導と、鉱山開発業の二本立ての活動は続いていった。ただし、紅卍字グループが合流したことによって、そこに大陸紅卍字会道院との交流という目標も加わることになった。実際そのために、昭和17年3月から2カ月間、小田と呉は日本佈道団派遣を大陸紅卍字に依頼する目的で、大陸に渡航している。しかし、最後に訪れた済南の道院で、時局困難のため現在の派遣は適切でないとの壇訓が出て、結局この企画は不首尾に終わった²⁾。

〔長岡良子の合流と台頭〕

この第Ⅰ期璽宇が発足してからしばらく後、別の新たな宗教グループがこれと合流することになる。それは当時、東京で真言密教系の霊能者として活動していた長岡良子（のちの璽光尊）を中心としたグループであった。その出会い

1) 日本の紅卍字会道院のグループが峰村のサークルに合流するに至ったいきさつについては、主に呉清源『以文会友』白水社、1984、pp. 100-103に依る。

2) 呉清源『同前書』pp. 108-109。

のきっかけは、宗教上の問題でなく、むしろ鉱山経営上の問題であったとされている¹⁾。当時長岡は、信者の1人で、青森県の野内で銅鉱山の開発を手がけていた大成鉱山の経営者であった西口という人物の依頼で、その銅山経営の手助けをしていた。昭和11年頃より16~17年まで、毎年夏期には現地に出向いて直接指導にあたっていたほど、そのかかわりは深いものであった。しかしこの銅山の経営はやがてゆきづまり、同じ鉱山開発業者の峰村に財政上の援助を求めることになったのである。峰村と長岡の出会いのきっかけとなったのはこうした経営問題であったが、最初の出会で、両者はともに宗教活動をおこなっているのを知り、たちまち意気投合したという。そして、長岡およびその信者グループの人々が、たびたび峰村の璽宇のもとに出入りするようになったのである。

ここで長岡良子のそれまでの生活史の概略を述べておこう。彼女は明治36年、岡山県御津郡江与味村（現旭町江与味）の農家、大沢幾松、カツの五女として生まれたとされている²⁾。幼少時は聡明で、活発な少女だったようである。小学校高等科1年終了後、県内後用郡井原町（現井原市）の眼科医院の見習い看護婦として勤めに出た。20才の頃神戸に出て看護婦をしながら夜間看護学校に通ったが、そのうち肺結核にかかった。そして23才の時、再びもとの眼科医院にもどったとされている。この頃はよく近くの青野村（現青野町）にあった禅宗寺院に出入りしたという。

25才のとき、日本郵船の社員、長岡貞雄と見合い結婚し、横浜に移り住んだ。夫によると、結婚後3年程は変わったところはなかったが、その後、3カ月に1度ぐらい高熱を出し、発作を起して仮死状態におちいるようになった。そして

- 1) 両者が最初に出会ったのがいつかという点に関しては、昭和16年（梅原正紀）、昭和17年の秋（呉清源）、昭和18年8月13日（勝木徳次郎）の三説がある。呉と勝木の説は関係者の証言として信憑性が高いが、現在の段階では、どちらが正しいか判断できない。なお、両者の出あいのいきさつについては勝木徳次郎氏よりの聴取による。
- 2) 長岡良子は自身の出生や前半生について、自らほとんど語っておらず、不明の点が少くない。なお、出生に関しては、本人は大沢夫妻は養父母であるとしている。「金沢事件」の際の新聞記事（「朝日新聞」昭和22年1月20日）には本人の弁として、実母は久邇宮家から岡山の池田侯に降家した人で、精神異常の扱いで座敷牢に入れられていたと述べたとしている。

意識がもどってから「神様の後光が見えた」などと語ったという。また親類のものがいつどんな用事でやってくるかを言いあてるなど不思議なことも少なくなかったという。昭和8年頃、原因不明の高熱が続き、東大病院で診察を受けたところ、「ハイネメジン」（一種の小児マヒ）と診断された。そのことから神がかりがこうじるようになり、彼女は夫婦生活も嫌い、夫に離縁を迫るようになった。この時点で既に彼女のまわりには、その霊能をしたう人々のサークルが形成されつつあった。後に壘宇の最高幹部として活躍し、最後まで壘光尊につかえ、壘光尊帰幽後、壘宇を実質的に主宰している勝木徳次郎（照観世音）も、この頃から彼女のもとに出入りしていた。夫は妻の側からの離縁の申し出もあり、またたまに船旅からもどっても、いつも信者が家に押しかけていて、家庭生活どころの話ではなく、結局、昭和10年頃より別居するに至った。

このような状況のなかで、昭和9年9月20日、彼女は自己の救世的使命に関して決定的な啓示を受けた。

その日病床におりました私は、病遽に革り、つひに、正午……霊界（天上界）に召されてまいりました。そして……それから四時間と十五分にして又、この現象界（地上界）に呼び戻されたことであります。……この時次のような御啓示を頂いたのでございます。

『永却不變の真理を説いて、衆生を濟度し、非常時国家につくせ』と。……このような重大な使命を負いました私は、全く「没我」「無私」となり……¹⁾

この頃の彼女の信仰は弘法大師への信仰を中心とする真言密教的色彩のつよいものであった。ただ、当時は教団組織と言えるようなものが形成されていたわけではなかった。当時、東京の蒲田に住んでいたことから「蒲田の（有徳の）奥様」と呼ばれたが、こうした呼び名からも推測されるように、その宗教活動のあり方は、人から依頼を受ければ、霊能により病氣直しなどをするといった、インフォーマルで個人的な救済活動を中心としたものであった。それでも信者

1) 長岡良子述『真の人』pp. 2-3。

は東京、横浜といった地元にとどまらず、金沢を中心とする北陸、北海道や青森など各地に散在するようになっていった。璽宇との出会いのきっかけとなった大成鉱山の経営者もそうした地方の信者の一人であった。

さて、璽宇は峰村を主宰者としつつ、四谷の峰村家を拠点として宗教活動を続けたが、そこには、既述したようなさまざまな宗教的背景をもつ人々が寄り集っていた。したがってその組織の実体は、教団というより、ゆるやかに結びついた信仰サークルに近かったとみなすことができよう。そして、このなかで、やがて、豊かな靈感に加え、上品な品格と堂々とした威厳をそなえた長岡良子が、その宗教的魅力によってグループ内に大きな信望を集めるようになった。峰村兄弟が不在のときなどは、彼女が御神示の解説や、信者の信仰指導をすることもまれではなかった。また、昭18年の秋には彼女の口述になる『真の人』なる冊子を刊行し、自分の信者や璽宇の人々に配布している。これも璽宇内での彼女の宗教的リーダーシップの高まりをあらわすものであろう。

これに対し、峰村兄弟の方は、兄の恭平が病の床につき、またその代理として義弟が指揮していた砂鉄採掘事業の方も経営がゆきづまり破産状態になったこともあって、次第に信者に対する指導力を低下させていった。病身の峰村自身も次第に弱気になり、かつての威厳を失い、空襲警報の度に動揺を示すようになった。他方、長岡良子の方は非常事態にも落ちついて振舞い、戦争末期には信者の信望は自然に峰村兄弟から彼女の方に移るようになっていった。

こうした指導者の交代を決定的なものとしたのは、昭和20年5月25日の東京大空襲である。このころ、横浜の空襲で焼け出された長岡良子や呉清源夫妻など璽宇のメンバーが十数人璽宇の本拠である四谷の峰村家に住み込んで生活していたが、その日の空襲でそこが焼失し、全員焼け出されてしまった。そこで峰村恭平と彼女が相談の結果、病身の峰村は数人の信者ととともに、別荘のある山中湖畔に疎開することになり、他方のこりの集団は彼女と行動をともにすることになった。四谷の峰村家の焼失は実質的な活動拠点の喪失を意味し、峰村の疎開はリーダーの璽宇活動からの実質的な離脱を意味する。これによって、第I期の璽宇は、いわば、自然崩壊をとげたと見なすことができよう。

なお、この間、昭和20年2月8日、当局による璽宇に対する最初の統制がおこなわれ、長岡良子が鶴見警察に検挙された。この頃、既に警察は、天照皇大神を祀り、世直しの言辞がみられるということで、璽宇に対する内偵を進めていたとされている。ただ、さほど影響力がないということで放置されていたらしい。この時の最初の嫌疑は、むしろ、峰村の事業への資金融資に関するトラブルをめぐるものであったとされている。しかし、その際『真の人』の冊子が発見され、容疑は不敬罪へと広がった。『真の人』を読むかぎり、当時の戦争を「世界維新の大聖戦」(p.5)ととらえ「聖戦完遂」「天業翼讃」を強調する内容のものになっており、明白な不敬にあたる言辞は含まれていないように思われる。あるいは自らを世直しの「天責」(p.3)を受けているかのごとき記述が問題となったのであろうか。なお、この時は呉清源による内務大臣への働きかけと、彼女が拘置所内で吐血したことから、3月3日に放免(病院へ入院)されている。

2. 第Ⅱ期

〔昂揚と緊張〕

璽宇の第Ⅱ期の活動は、四谷の璽宇を焼け出された長岡良子を中心とするグループを核にして、実質的には昭和20年5月31日、寄留先の大田区鶴ノ木の岩崎家において発足する¹⁾。その日、呉清源の妻であり、旧璽宇においても神巫役を務めるようになっていた中原和子の筆を通して、次のような神示が降りる。

浄地ニ浄人ヲ集メテ浄業ヲ建ツ

神ハ不浄ヲ捨テサレトモコレヲ許サス

汝ラノ発足ハ真ニ滅私ヨリ始メテ以テ天下ヲ靖スヘシ

ソレ方今ノ危急ヲ救ヒ得ルヤ否ヤ実ニ汝ラノ双肩ニカカレリ……

今コソ実行ノトニナリ……身ヲ以テ衆ニ示シテ八紘一字ヲ実現セントコトヲ命ス

1) ただし、正式の結成式がおこなわれたのは、このときから約半年後の昭和20年11月15日である。

この神示は、その内容からして長岡良子を中心とした新しい璽宇の発足宣言とみなすことができよう。こうして発足した第Ⅱ期の璽宇がいつ第Ⅲ期に移行するのか、その画期をはっきりと指摘することは困難であるが、しかし、おおそのところ呉清源夫妻が相次いで璽宇を離脱する昭和23年の末あたりが、転換期とみることができるように思われる。もしそのようにみることができるなら、この第二期は約3年半の短い期間ということになる。しかしこの期間こそ、璽宇がその運動史を通して最も高い宗教的昂揚と、最も強い精神的緊張を味わった、いわば疾風怒濤の時代とみなすことができよう。この時期の璽宇は、終戦直後の混乱した社会・世相の中を、切迫した危機感と期待感に促されて、しばしば社会との摩擦を恐れぬ大胆な行動を示しつつ、世直しの成就にむけて、急ぎ足で駆けぬけたのである。

この時期に璽宇の内部の霊的昂揚と精神的緊張を高めたと考えられる要因として、次のような点をあげることができよう。まず第一に、璽宇の集団が、この間一貫して強い終末論的危機感／待望感に支配されていたことを指摘しておかねばならない。すでに時局の進行に関する終末論的危機感／待望感は、昭和18年に出された『真の人』のなかにはっきりとうかがわれる。今回の日本と米英との戦争は「有史以来の人類の非常事態」であるが、これらをのり超えてはじめて世界の建直しが達成される。しかし、そのためには日本人は今こそ「個人主義・自由主義・唯物主義」を棄て、「真の人」にたち還らねばならないといった主張が繰り返されている。

その後、事態は頻繁な空襲にあらわれるような戦局の悪化、日本の降伏とその後の社会的・経済的混乱、占領軍の進駐と急激な戦後改革の実施と急速に展開していった。いうまでもなく、こうした一連の事態の進行は、天皇を中心とした「八紘一宇」の世界の実現を待望する璽宇にとっては、危機的状況の一層の深刻化を意味した。そもそも、終末論的意識は深い危機感（絶望）と巨大な期待感（希望）が激しく交錯するダイナミックな意識形態である。これを終末論的な緊迫感と呼ぶとすると、それはある意味で、危機が深刻化すればする程、先鋭化してゆくという面をもっている。事態が悪化すればする程、あるいは悪

化が予想されればされる程、人々の危機感や反省も深まり、改心や覚醒が促されると期待できるからである。そしてこの時期の「神示」を追跡してゆく限り、璽宇は、この間、絶望と希望の激しい動揺を繰り返し、しかもその動揺の振幅を次第に大きくしていった様子が見られるのである。

さらに救世主である璽光尊が、きわめて霊的に敏感な体質を有し、霊的な不浄に感応することでしばしば身体的な苦境に陥ったことも¹⁾、璽宇内部での終末論的緊迫感の増幅につながった。救世主のこうした苦境は璽宇内の人々にとって、強い神の警告や改心の促しとして、受けとられるからである²⁾。こうして璽宇は終戦直前から終戦後の混乱のなかで、むしろその終末論的緊迫感を一層つららせていたといえよう。

この時期に璽宇を支配した昂揚や緊張感をもたらしたと考えられる第二の要因として、璽宇の方針や活動の決定が、この間ほとんど全て「御神示」のみに委ねられたという神示中心、神示絶対の運営のあり方をあげることができよう。

この第Ⅱ期においては、「御神示」は神巫役を務めた中原和子、叶子姉妹を通して下された。その方式は、神前で長岡良子（璽光尊）が祈りを捧げるなか、和子に神仏が降臨し、叶子の差し出す半紙の上に筆で神示をあらわすというものである。叶子が筆をとる場合や、和子が叶子を伴わず筆をとる場合もあったが、基本的なパターンとしては上記のようなものであった。ただし、その際、神巫役は、単に自分に降りた神仏の神示を出すというのではなく、あくまで璽光尊に感応している神仏に霊的に同調し、その神仏の神示を出さなければならぬと意義づけられていた。その意味で、神示の場における霊的リーダーシ

-
- 1) 不浄な霊の靈障により苦しんでいると思われる人物があると、璽光尊自身もそれに感応し苦しんだとされる。また食物の不浄などにもきわめて敏感で、そうした食物は一切受けつけなかった。
 - 2) 天理本道は昭和13年、大量の不敬文書の官憲等への配布により一斉検挙をうけるが、検挙されるのをある程度予想しつつ、彼らをしてこうした大胆な行動に踏み切らしたのは、天啓者大西愛治郎の妻トヲの病気の悪化であった。本道の信徒にとって、こうした事態は、終末の切迫を前に躊躇するなという神の強い促しと受けとられた。

ップという点で、璽光尊が一応主導的な立場に立っていたとみなすことができよう。とはいえ、一部で考えられているように、決して璽光尊自身が直接神示を語ったり、書いたりしたわけではないという点は注意しておく必要がある。神示は、直接的には、あくまで神巫を通して出され、結果として出された神示には璽光尊自身も従わねばならなかった¹⁾。

神示は昭和20年5月31日以降、頻繁に出されるようになり、しばらくすると毎日、しかも時間を決めて、日に4～5回ずつ出されるようになる。ノートに書き写された神示は、昭和21年11月末頃で終了している。これは璽宇の金沢移転の直前である。しかしこの時期に神示がぱったり途絶えたというわけではないようである。金沢での生活はたいへんあわただしく、神示を書写する余裕がなくなったというのが真相に近い。とはいえ、これ以後、神示は次第に減少していったようである。ノートに書写された神示に関して言うと、約1年半の期間のあいだに、大学ノートにびっしり、ほぼ40冊分もの大量の「御神示」が下されたのである。

ただ量が多いというだけではない。その内容も多岐にわたり、あるいは詳細に及んでいる。神による世直しの構想、世直し後の社会のあり方に関する青写真など、神の世界経緯を述べた神示がその中核をなしていることは言うまでもない。しかし注目すべきは、璽宇としての日々の行動の指令、璽宇における日常生活のあり方に関する指示、璽宇に集う人々への個別的な信仰指導など、璽宇の運営、活動のかなり具体的で、細かい側面にまで言及したものが含まれており、しかもそれがかなりの分量にのぼっているという点である。このことは、まさしくこの時期の璽宇が、璽光尊もメンバーも含めて、日常生活から運動方針に至るあらゆる側面で、神示中心、神示絶対の原則の下に、そして次々と神示で下される指令、指示のままに振舞おうとしていたことを示すものといえよう。そして実際そのように振舞ったことは、実際の行動の経過を通してある程度確認することができる。それは少なくとも「金沢事件」の際に、璽光尊や璽

1) 璽光尊自身かつて、一度の例外（生地岡山への「遷宮」の神示）を除いて、決して神示にそむいたことはなかったと述べたとされている（勝木徳次郎氏よりの聴取）。

宇幹部を検挙した警察が当初考えていたような、「黒幕」幹部が「精神異常者」（璽光尊）を使ってたくらんだ運動ではなかったのである。

こうした神示中心の運営は、それを担う人々に昂揚感と緊張感をときに与える。まず、与えられる指令は神仏から直接下されたものであるから、いわば神直々の召命ということになる。したがって、それはそれを与えられた人々に聖なる使命を担っているという強い使命感を喚起し、その人々を昂揚させることになる。しかし他方、神示による指令はしばしば人智による予測を超えている。人はいつどんな指令・指示を与えられるかわからないという緊張感にさらされることになる。しかも与えられる指令や指示は必ずしも容易なものではない。天皇・皇族やマッカーサーへの璽宇「参内」への働きかけのように、その実現が大変困難と思えるもの、あるいはその実行が外部の社会との間に強い摩擦を生じされる可能性が高いものも少なくない。にもかかわらず、それは神示であるからには拒むことのできない絶対的な命令である。こうして璽宇の人々は新たな神示を下される度に、高い昂揚と強い緊張をあげられることになったといえよう。また、神示に従った行動が結果としてもたらした社会的摩擦は、璽宇の人々の緊張感を一層増幅させることになったのである。

この時期の璽宇の霊的昂揚と精神的緊張を考える場合、更にその集団のあり方やおかれた状況も考慮する必要がある。既に述べたように、璽宇のもとに最初に集った人々の多くは、空襲で焼け出された人々であった。そのため璽宇は初めから、単なる信仰の共同体にとどまるのではなく、同志たちの生活共同体としての性格をもつことになった。こうした生活の共同により、集団の凝集性はおのづから高まってゆく。後に「璽宮」と呼ばれる住居に起居を共にした人の数は十数人から、多い時でせいぜい30人程度で、けっして多くはなかったが、それらの人々の間には同志的、あるいは家族的な絆で結ばれた強い連帯がつくり出された。

しかも、その信仰＝生活共同体は、本来皇居の雛型としての意義をもつものであった。したがってそこは浄化された聖たる世界として、墮落した外社会＝俗界からはっきり隔離されねばならなかった。そこで外社会の穢れの聖域への

不慮な侵入を防ぐため、外社会との接触には慎重な配慮と手続きがとられたのである¹⁾。特に璽光尊へは外部の者がみだりに拝謁することは許されなかった。また、その内部には聖域にふさわしい独自の秩序（それはある程度、宮中をモデルにしたものであった）が確立されねばならなかった。こうした璽宇内部には、小規模ながら外部の世界からかなりの程度独立した、凝集性の高い独自の小宇宙の世界が形成され、維持されることになったのである。

そして、何よりもこの信仰＝生活共同体の生活の中心は種々の宗教的行事であった。それはさきに述べた「御神示」だけにとどまるものではない。「天璽照^{てんじしょうみょう}妙」と唱える独自の祈りが頻繁に唱えられたし、また夜になると、しばしば霊界の浄化のための諸霊の供養が実修された。呉清源はこの頃の璽宇での日々を「行にあけ、行に暮れる毎日」²⁾と表現している。それに璽宇内では「宇曆」と呼ばれる暦が作られ、それにのっとった年中行事、祭事がかなり頻繁に催された。信者たちはその準備や実施に多くのエネルギーを割く必要があった。しかもそうした祈りや祭事のなかで、神巫だけでなく、他の信者のなかにも「接霊」と呼ばれる一種の神憑りの状態を呈する人がしばしば現われた。外界から隔離されたこの信仰＝生活共同体は、祈り中心、修行中の生活のなかで、かなり持続的に靈的昂揚、靈的興奮の状態を維持していったと考えることができる。そうした雰囲気的一端は次の文からもうかがえよう。

信者は睡眠不足の中で一心を込めて称名（「天璽照妙」の祈り—引用者）を唱えることにより、半ば神憑りに近い状態になるが、そのような状態の中で働いていると自分でも信じられないようなことができるようになる。……それを体験した信者は感激し、さらに信心を深めてゆくのである³⁾。

1) 「璽宇の中での生活は戒律の厳しい修道院での生活とまったく同じであった。……私生活はいっさい否定された。無駄口をきいてはいけないし、俗（世間）の声を聞いてもならない。当然信者以外の人と付き合ってもいけない」（呉清源『以文会友』白水社、1984、p. 128）。

2) 呉清源『同前書』p. 129。

3) 呉清源『同前書』p. 129。

しかし、他方この間を通じて、璽宇共同体は、絶えずその存立の危機に直面し続けてきたとも言える。というのは、この期間中に、この共同体は、結局、安住の地を見出すことができなかったからである。第Ⅱ期の約3年半のあいだに璽宇は、大田区鶴ノ木の岩崎邸を振出しに、世田谷区等々力、日置昌一郎（昭和20年6月末～）→世田谷区松原、徳川邸（昭和20年7月～）→世田谷区松原、重松邸（昭和20年8月前後～）→東京小金井市、大井包高邸（昭和20年10月末～）→杉並区関根町、小俣新五左衛門邸（昭和21年2月下旬～）→金沢市西町、前多一郎邸（昭和21年12月初旬～）→金沢市松ヶ枝町、前多平作邸（昭和21年12月中旬～）→金沢市長町（昭和22年3月中旬～）→山中湖畔、宣野家別荘（昭和22年夏～）→青森県八戸市、宮重邸（昭和23年1月～）→東京目黒区祐天寺（？）→東京大倉山（昭和23年7月～）→箱根千石原、浅野家別荘、とほとんど腰を暖める間もなく、各地を転々と移動している。しかも上述した地点には数日間の短期滞在地は含まれておらず、これらを含めると移動の回数は更に大幅に増えるであろう。

こうした移動は「遷宮」と呼ばれ、神示にもとづくものであったが、その実態から判断して、自発的な行動とはみなしえないケースも少なくなかった。つまり、家主から退去を求められる、あるいは警察により圧迫を受けるなど、何らかの理由でそこに住み続けることが困難な事態が生じたための移動も多かったのである。移転先が決まらないうちに、立ち退き期限がきて、立ち退きを迫られることもまれではなかった。そうした場合には確たるあてもないままに出発せざるを得なかったのである。定住のための居宅を購入する資金やチャンスが全くなかったわけではないが、その居宅は「璽宮」、すなわち皇居にあたるということから、璽光尊は献納以外は認めず、結局話はまとまらなかったという。こうした状況であったから、この間の璽宇は、いつ移転を迫られるか、いつまでその共同体を維持できるのか、絶えざる緊張と不安にさらされつつ、各地を流転し続けたといえよう¹⁾。

1) 世間やマスコミに追われるようにして、集団で各地を「漂流」しつづけた団体に「イエスの方舟」があるが、この時期の璽宇、特に「金沢事件」以降のそれは、「方舟」の「漂流」に近い状況にあったといえるかもしれない。

〔敗戦までの璽宇〕

璽宇の運動史のなかでも、この第Ⅱ期に関しては比較的多くの資料が残されている。なかでも「御神示」を筆写したノートは、この時期の璽宇の思想と行動の両面について多くの事を教えてくれる重要な資料である。既述したように、この「御神示」には信者に対するかなり具体的な行動の指示までが含まれているからである。この「御神示」ノートは金沢遷宮の直前で終わっているとみられるが、金沢での動向については、「金沢事件」にかかわって、むしろ報道資料が多く残されている。したがって、第Ⅱ期、特にその前半部に関しては、かなりの程度具体的にその運動の軌跡を明らかにすることが可能である。以下では、こうした資料や、関係者の回想（録）などを手がかりにして、この間の運動史の再構成を試みることにする。なお思想面の立ち入った検討については次章に譲ることとし、ここでは主に行動面の展開について述べる。

昭和20年5月31日、実質的な璽宇の結成宣言が神示として出された後、まず計られたのは璽宇内の生活秩序の確立である。とりわけ同志たちの信仰生活のあり方への指導が重視された。各人が一から出直す覚悟で、魂の修行に打込むよう、繰り返し指示が出されるとともに、定時、あるいは定例の礼拝についても取決めがなされた（「御神示」6月1日）。また、幹部8人の指名がおこなわれる（「同」6月6日）とともに、その中に（長岡良子）への帰一が強調される（「同」6月17日）、組織中枢の基礎づくりも始められる。それと並んで、「業の開発」（「同」6月20日）による活動のための経済的基盤の確立への努力も要請された。

ところで、神示に初めて「璽光」という言葉が出るのは6月22日である。

長岡良子ハ既ニ汝ラノ導師ナラスシテ世ヲ救フ神ナリ 称号ハ須クコノ意
ヲ体スヘシ……現幽両界ニ於ケル果ヲ先導セル璽ノ光ナリ 救世ノ仏ナリ

少なくとも璽宇新発足後まもなく、長岡良子を救世主と仰ぎ、璽光と呼ぶことが始まったと言えよう。また別の神示（7月16日）では、璽光は「皇威維新」

と呼ばれる世直しの中心となる「聖仁」にあたり、璽宇はその下に滅私奉公する勤皇の志士の集まるところとされており、既に璽宇における璽光の絶対的権威とリーダーシップが確立されている。また天皇との関係では、璽光は、万界の統治者天照皇大神の現界における「代行」者である天皇を助け、「皇威ヲ世界ニ放ツヘキ唯一ノ忠臣」（「同」7月12日）と位置づけられている。

このような組織の基礎づくりの努力と並行して、徐々に世直しをめざす外部への働きかけの試みも始められるようになる。最初に企画されたのは大陸（満州）の世界紅卍字会道院と交流であった（「同」6月6日）。その意図は紅卍字を通じて、満州国皇帝に璽宇の存在と意義を伝え、協力を求めることにあったと考えられる（「同」7月26日）。当時の満州国皇帝の側近には紅卍字会道院の信者が少くなかったからである。紅卍字の信者でもある呉清源と璽宇幹部の勝木徳次郎の二人が使者として選ばれ、呉と軍の交渉で便乗する飛行機と日時も決まり、この話はかなり具体化した¹⁾。しかし出発直前の7月初め、璽光尊と勝木が玉川署に検挙され、これは実現しなかった。検挙の容疑は不敬罪であった。この時、璽宇は等々力の日置昌一宅に移っていたが、家をあげ渡したかたちになった日置が、何とかしようと、璽宇で天照皇大神から神示を受けていることを警察に訴えたためとされている。璽光尊は拘留中吐血し、10日ほどでもどされたが、勝木の方は約5週間拘留された。

また、「天の岩戸」に隠れて、ひたすら「岩戸開き」を待っている天皇に、それを開く鍵を持っている璽光尊の存在を知らせねばならないとして、宮中への働きかけも企てられた（「同」7月17日）。これは寄留先の徳川齊宏に神示による指令として与えられたが、結局、徳川が動かず、成就しなかった。こうして、まず当初の企てはいずれも挫折に終わった。こうした事態に神示は、神命を奉行できない璽宇は全員玉碎せよ、と激しい叱責の言葉を浴せている。なお、世界紅卍字会道院への働きかけ、そして特に宮中（天皇）への働きかけの試みは、その後も何度も執拗に繰り返されることになる。

さて、8月に入り、いよいよ戦局も末期的様相を呈してくるようになると、

1) 呉清源『前掲書』p. 122。

敗戦と世直し

神示の内容はますます終末論的な緊迫を高めてゆく。

内地ニ大變オコラントス

璽宇ヲ決起セヨ 一死以テ神命ヲ奉シ君国ニ報ユルトキナリ……天責アルモノヲシテ真ニ目サシムヘシ（「同」8月8日）

全大和民族 皇民タル自覚ニ徹セサレハ之ヲ滅スルモ敢テ辞セサル也（同上）

現局ノ打開ニハ既ニ人智及ハス 唯神命ヲ奉行シ真理ヲ実践スルニアルノミ（同上）

〔敗戦と璽宇〕

結局、神示の悪い預言の方が適中し、8月15日、日本は敗戦の日を迎える。しかし、こうした事態に直面しても、璽宇は必ずしも怯みをみせてはいない。

徒ニ坐シテ時勢ヲ嘆スルハは無信ノ徒ナリ 神ノ絶対ト真理ノ絶対ヲ知ラハココニ最悪ノ事態ヲ迎ヘテ猶敢然トシテ神命奉行国体護持ヘノ大責ヲ自ラ負ハサルヘカラス……神ノ聖戦ハヤマサルノミナラス唯今後民族ニ課セラルル困苦ハ即チ神界ヨリノ鞭ナリ……

皇祖ヲ奉シ

天皇ヲ奉シ

神命ヲ奉シ

真理ヲ行スル唯ココアルノミ（「御神示」8月16日）

戦局の破局は神罰であり、危機の一層の深化であっても、けっして聖戦の終りではない。それは世直しの実現まで続く。その世直しは「武力ニ縋ラントシ科学ニ縋ラントシ不可能」（「同」8月29日）であって、神威によって初めて実現されるとする。

また、天皇への尊崇や期待もかわっていない。

最悪ノ場合ハ現人神ヲ戴キ神命ヲ奉シテ最後ニ至ルマテ国体護持ノ為タタカワサルヘカラス（「同」8月21日）

しかし、その天皇の尊厳が、そのことを知らない「夷族」の統治により、危機に傾しようとしている。今こそ国難打開の鍵をもった救世の聖仁の存在を天皇の耳に入れねばならない。こうして再び、天皇・宮中への働きかけの努力が開始された。

ただし、皇居に関しては、「宮城ノ消失ハ既ニ宮城タルノ意義ナキ証、新都ヲ設計シ新城ヲ営ム」（「同」9月21日）。しかもそれは「スヘテ璽宇ニヨルナリ」としている。その皇都は富士に求められた（「同」8月24日）。

また、この時期から、天皇だけでなく、各方面に「正光ヲ放ツ」（救世主璽光尊のことを知らしめる）べしとする指示が頻繁に出されるようになる。これは「神慈ヲ与へ人ヲ救フ為ナリ」（「同」9月5日）とされている。ただし、その対象となったのは、主に皇族（久邇宮、高松宮、東久邇宮（当時の首相）、梨本宮など）や政治家（緒方竹虎）であって、天皇や天皇制護持への影響も期待してのことであると思われる。さらに、深刻な窮乏や病気の流行といった事態が予想される冬期に、一般民衆に対する「天慈」（慈善、救護活動）をおこなうことで、民心掌握をはかるといったプランも提起されている¹⁾。これらは璽宇の世直し戦略が、もっぱら天皇に働きかけるといった一元的で直線的なものから、しだいに迂回の方策も含む多角的なものへと展開してきたことを示している。

さて、占領軍の進駐とともに、旧体制の廃止と戦後改革の実施がいよいよ日程にのぼってくるが、これに抗するかのように、神示のなかに璽宇独特の世直し後の社会秩序のあり方に関する構想の大綱が示されるようになる。その内容の紹介と検討は以下の章に譲るが、昭和20年9月26日以降、断続的に「外交」、「経済」、「政治」、「商」、「人タルノ十戒」、「兵」、「工」、「立法」、「祭祀」、「鉱業」、

1) 世界紅卍字会道院はこうした慈善、救済活動にたいへん力を入れていた（世界紅卍字会はそもそも赤十字を意識してつくられた慈善団体である）。このプランはある程度そうした紅卍字の活動をモデルにしたものとも考えられる。

敗戦と世直し

「漁」、「史」、「憲法」、「食」、「医道」、「業」、「衣」、「暦」、「教育」といった順に、部門別に構想が示されてゆく。これらの項目からもわかるように、その構想は人事万般にわたっており、璽宇の世直し構想が社会、生活全体に及ぶ全面的なものであったことが伺われる。全体として復古的な精神に貫かれており、また旧璽宇以来の「教業一致」の精神を受継いでか、社会生活のあらゆる部分が宗教的精神、皇道の精神に即しておこなわれるべきことが主張されている。

ところで、新皇都の建設、「天慈」の代行など、璽宇としておこなうべき行動計画の決定や、世直し後の社会に関する独自の構想の提起といった事態の背後には、敗戦という新しい現実と直面したことからくる璽宇の世直しの実行主体としての自覚の高まりがあるものと考えられる。敗戦とともに翼賛すべき体制そのものが解体し、より積極的に璽宇自身で新しい秩序を構想しなければならなくなったのである。しかしそうした目標を達成するためには当然、組織的、経済的な裏づけが必要となる。そしてそれは璽宇に対して、組織や財政基盤の強化という課題を課すことになる。璽宇は10月末に小金井の大井包高邸に移るが、それ以後、こうした課題の達成に特に力を注ぐことになる。11月13日の神示によると、達成すべき具体的な課題と、その達成の順序は次のように設定された。

来ルヘキ国内大困難ニ際シ活発ナル天慈代行ヲ実施スヘク次ノ事ヲ命ス

一、資金調達

一、食糧調達

コレ第一段階

一、支部結成

一、慈協院設立

コレ第二段階

一、本部拡張

一、璽衆集結

コレ第三段階

以上ヲ実践セル間ニ緩急ノ大變オコリテ事態急変スヘシ

なお、「慈協院」とは、天慈をおこなう機関を言い、「璽衆」とは、璽宇の正式メンバーの手足として働く支援者を言う。こうした課題設定をおこなった後、11月15日、璽宇は正式の結成式を挙行了。そしてそこで璽宇の組織は、神に直接仕える幹部、それらを含めて、璽光尊の直接指導を受け、世直し実現の中核としての役割を有する者、即ち璽宇、さらに、上記の人々の指導によって世直しに協力する者、即ち璽衆の3層から成ると規定された。その完成時には幹部8人、璽宇30人、璽衆300人が揃い、その時、世直しの大業が大展開するという。また支部は全国で8カ所で設立を目ざすとしている。これを受けて、まず、12月28日に青森支部が発足した¹⁾。

〔世直しの代行者・璽宇〕

さて、この間あい変わらず宮中、皇族家への働きかけが続けられたが、一向に効を奏さなかった。そのためにしだいに、皇族といっても神命を奉じなければ神罰を受けるといった、皇族への批判的言辞もなされるようになる。こうした焦燥感や失望感は、大難局が迫りつつあるという切迫感や璽宇の組織化の進展とあいまいまって、璽宇や璽光尊が世直しに果すべき役割に関する主体性の意識（自分たちがやらねばならないとの自覚）をますます高めることになったように思われる。

璽ノ諸行ハ天子ノ代行ナリ（「御神示」11月19日）

天子ノ靈璽今ソノ実ヲアラハスヲ得ス

ココニ下レル大聖臣コレソ位臣ニシテ形人ヲトレトモ靈璽以テ皇位ヲ擁護シ君側ヲ養成シテ万民ヲ救ハントスル（「同」11月22日）

璽宇即チ皇居ナリ（「同」12月4日）

ここに至って、璽宇および璽光尊は、働きかけに応じようとしぬ宮中、皇

1) こののち、昭和21年3月に神奈川支部、9月に加賀支部ができています。

族家に代って自ら世直しを代行する場所、代行する者と意義づけられたのである。そしてこの考え方は12月8日に出された璽宇の内部規則、「宇規」の中に明瞭に盛り込まれた。そこでは璽宇は「真理具現ノ代行」、「勤皇救世ノ総本部」と定義されたのである。

璽宇が「救世ノ総本部」「皇居」であるからには、それにふさわしい形態と内実を備える必要がある。以後、施設面での条件整備、内部諸規定の整備、人材の確保や養成が急がれることになる。

まず、施設面での条件整備についてと、昭和21年2月23日の杉並区関根町の小俣新五衛門邸への「遷宮」によって、一段落がついた。ここは「屋敷も広く、家も幾棟もあり、豪壮な邸宅は一見宮家か富豪の住居のように見えた¹⁾」からである。また「皇居」にふさわしい内部秩序を確立するために、璽宇内の霊的清浄を保つための「抜淨規」（「同」3月11日）、神家内の秩序の大綱を示した「神家憲」（「同」3月18日～）、神家内での儀礼を定めた「神家諸儀式」（「同」4月6日～）が神示にもとづき制定された。それら璽宇内に関する諸規則は「宇儀」と呼ばれ、「宮中ノ諸法ノ基ニシテ内政ノ礎ヲナス」（「同」昭和21年2月14日）とされた。さらに「救世ノ総本部」たるべく「破壊期ノ制、一時ノ便法」として、「璽宇内閣」の結成の構想も打出された（「同」昭和21年1月23日）。

こうした内部の条件整備と並行して、世直し実践の柱として社会や民衆に向けた働きかけやアピールも徐々に企画、実行されてゆく。璽宇の世界観では、世直しの遂行や経世の側面においては天照皇大神を中心とする神道の神々が主な役割を演じるのに対し、救霊（霊の浄化）や民衆救済の側面では、仏や菩薩が主役を演じるとされていた。特に後者の面では、璽光尊の真言密教的背景とかかわってか、弘法大師や観音菩薩の役割が重視された。そしてこの時期には、しだいに衆生救済を担うこうした仏（菩薩）存在や役割がクローズ・アップされてくるのである。「神位ヨリ下リテ菩薩ヲモッテアラワル 来世ノ人心導クニハマツ観音ノ慈悲ナリ」（「同」昭和20年11月9日）璽光尊自身、この時期には仏格としては「昭和ノ（弘法一引用者）大師」（「同」12月20日）であると規

1) 勝木徳次郎稿『璽宇と双葉山との関係』。

定されるようになる。さらに璽宇のいわゆる救衆の「三十三体観世音菩薩」¹⁾の絵像の完成に伴い、それを祝して昭和21年2月18日、初めて施徳として一般への開帳がおこなわれた。こうした璽宇皇居の解放は、その後も度々璽宇の祝日などにおいておこなわれたようである。その際しばしば、さきに企画された天慈の一環として、庭で困窮者に対する施粥の接待も実施された²⁾。

新居に落ち着くと、さらにより直接的な社会的アピールが試みられるようになる。それは璽宇の人々が「天璽照妙」の幟を立てて、その言葉を唱えつつ、隊列を組んで行進することで、「行軍」ないし「出陣」と呼ばれた。それは霊界の「祓浄」という宗教的、儀礼的意味をもつものであったが、地点地点で人々に教えを説くこともなされており、同時に璽宇の社会的アピールも目ざされたといえよう。第一回目は昭和21年3月6日に実施され、このときは宮城前一靖国神社—明治神宮の順にまわった。こうした出陣はこの後も頻繁になされ、いわゆる「マッカーサー事件」につながってゆく。

〔靈寿改元〕

さて、こうした璽宇の内部秩序の整備の進展、積極化は、世直しの切迫感に促されたものであると同時に、それを一層高めるものでもある。昭和21年も4月に入ると、「岩戸開き」（天皇に璽光尊の存在を知らしめること）の日の接近が度々預言されるとともに、その実現のための努力が強くメンバーに要請されるようになる。4月10日からは中原和子が叶子を伴わずに下す「単靈受示」の神示が始まるが、これは「岩戸ヒラキヲ控ヘテ殊ニ内部側近ニ授ク」もので、世直しの成就にとって特に重要とみなされる神示から成っている。いかにも世直しが間近に迫っているという意識を反映した神示の降下である。

-
- 1) 伝統的な三十三観音の信仰にならうものであるが、照観世音、天慈悲観世音など独自の観音菩薩が多く含まれている。また三十三観音は完成時の璽宇の中核メンバーの数（璽光尊1名、神巫2名、璽宇30名）に対応しており、例えば勝木徳次郎が照観世音（の役目）にあたるとされるなど、各メンバーと各観音の対応がある程度考えられていたように思われる。
 - 2) 警察の内偵者の報告書によると、これは昭和21年5月中に二度おこなわれている。また神示によると、5月24日には施徳として関根町一帯に精米を配ったとされている。（警視庁警察部長報告「璽光会の動静について」）

しかしながら、頻繁な出陣などの懸命の努力にもかかわらず、4月中に期待された「大転換」はついにおこらず、天皇に「光を通じる」というしかたでの「岩戸開き」は成らなかった。こうした事態は、璽宇をして預言不成就の危機に直面せしめたが、それは新たなしかたで「岩戸開き」をおこなうことで回避された。それは5月1日、「神家ノ岩戸ヒラキ」というかたちで、璽宇内において挙行され、これを機に新たな時代へ移行したという意味から「靈壽」という年号が定められた。ここで特に注目すべきことは、「岩戸ヒラキハ岩戸カクレノ真威璽光ヲ以テ迎ウルノ儀ナリ」（「単靈受示」、5月1日）とされ、新たにしつらえられた神前、玉座に「光衣」を着けた璽光尊が迎えられたことである。これらは璽光尊を天皇として位置づけることを意味するからである。

皇位ヲ繼承セル皇孫ヲ以テ天子ト称ス 天子即チ……宇宙生命ノ本源ニ合シ万靈ノ根源ニ立ツニアリ……

形位ヲ以テ実アラシムルヲ神意トス、シカレ共特ニ難局ニ処シテハ形位ト実ヲ以テ両分セシメ実ヲ以テ覆面シテ皇位ヲ守ラシムコトアリ（「単靈受示」5月8日）。

つまり、天皇は皇孫が天皇のカリスマをもって統治するのが本来であるが、危機的状況下では、皇孫以外でも実際に天皇のカリスマを有する者が、天皇にかわって皇位を守ることもありうるというのである。ここに至って璽宇は、天子を迎へるべき真の皇居から、その中に天子を載く真の皇居となったのである。ただし、皇孫以外の者が天子を務めるのは非常時局に限られる。ある程度世直しが進めば、それは皇系の最側近である皇太子、后宮に譲られる。こうした考え方から、以後、明仁親王への働きかけが重視されてゆくことになる。実際、6月頃より数度にわたって東宮御所を訪問し、白米献上などの行動がなされた¹⁾。

1) 9月21日には百名程が一団となって東宮御所を訪れ、皇太子への面会を求めている。面会は拒絶されたが、構内通過のみは許され、警備員の誘導の下、構内の一部を通過し引きあげた。（警視庁警察部長報告「璽光会の動静について」）

さて岩戸開きの成就により、時代はいよいよ「破壊ヨリ建設ヘノ転換」（単霊受示、5月8日）への移行期に入ったことになる。そしてこの移行プロセスは璽宇内閣建設→璽宇村興し→新文明建設と進んでゆくことされた。璽宇村は皇太子、「先帝」（昭和天皇）らを迎えて富士の麓に作られる新しい世界の雛型であり、将来に建築される本格的な新都（璽京）および新皇居（璽宮）の礎となるものである。璽宇内閣はそのために諸制の改革、準備をおこなうものと位置づけられた。

ところが、こうした新しい「神策」が打出された5月5日の単霊受示の「御神示」の最後に、突如、「光射スヘシ マッカーサー」なる言葉があらわれる。また、5月13日には今度は叶子の神示にもマッカーサーへゆけと出る。これは璽宇内閣において、マッカーサーの参加を期待してのことと考えるられる。こうしたマッカーサーへの期待は意外に思えるかもしれない。しかし、占領軍に対する積極的な評価はけっして唐突なものではない。この間の神示からは、なかなか覚醒しない日本人や皇族への失望感が深まってゆくのに反比例して、逆に占領軍への評価や期待が高まってゆく様子がかがわれるからである。

モシーノ皇民コレヲ以テ君恩ニ報キル能ハサレハムシロ夷手ヲ以テモコノ
放光イソクモノナリ（「御神示」昭和20年1月25日）

皇室真ニ神策を奉シテ聖極ノ藩屏タラサレハ夷手ヲ以テシテ神コレヲ崩壊
センノミ（「同」昭和20年12月21日）

一向に改心しようとしめない日本人を前にするとき、次々と旧体制を打破して、日本の改革を進める占領軍の行動は、神意の実現を妨げるものではなく、むしろ神意に即したものとも解釈されてくるのである。

マッカーサーへの第一回目の「出陣」は昭和21年5月22日におこなわれた。アメリカ大使館へ行って、直接マッカーサーに璽宇への「参内」を呼びかける神示を授けようという大変大胆な企てであったが、何とこれに成功してしまう。使者にたった中原姉妹は米大使館前でマッカーサーの帰るのを待ち伏せし、戻

ったところを車の前に立ちふさがった。そして車の中に和子が飛び込み、元師に神示を渡したのである。使者たちは捕えられたが、GHQ では処罰するほどのこともないとしてすぐに使者を解放した。

6月5日には、第二回目のマッカーサーへの出陣が挙行された。中原姉妹らは今度はGHQの総司令部に、警察の隙について正面玄関から堂々と入った。受付でマッカーサーに会わして欲しいといったが、押し問答となった。すると奥からアメリカ人が出てきて、使者たちを部屋へ招き入れた。そこで使者たちは璽字の主旨、来訪の主旨を説明した。警官は使者が出てきたところを捕えようとしたが、アメリカ人が裏口からそっと帰してくれた¹⁾。

この二回の出陣は璽字の側からすると、一応の成功を収めたことになる。しかもマッカーサーやGHQがメッセージを受けとった上で、使者たちを丁重に扱ったことから、璽字の志気は大いに高まり、マッカーサーへの期待は更に大きくふくらんだ。

しかし反面、この事件は日本の警察を二度も出し抜いたことで、彼等をいたく刺激することになった。これ以後、璽字に対して厳しい監視の眼が注がれるようになった。とりわけ出陣に関しては、いつも尾行がついてまわるようになった。これに対し璽字の側もあえて抵抗の姿勢を示し、警視総鑑や地元の警察署長に対して、不敬な行為をやめて改心するよう述べた神示を携えて、面会を求めするなどした。しかしこうした挑戦的態度は、警察との緊張をますます高めていったと考えられる。

第一回のマッカーサーへの出陣が、一応成就したあとの世直し期待感の盛り上がりを受けて、次に「本出陣」の挙行が日程にのぼる。「本出陣」とは、璽光尊自らが陣頭に立つ出陣で、これは璽光尊が自ら璽字を率いて世直しに立上ることを示す象徴的行為でもある。そして、5月28日には二重橋前で、また6

1) この事件に関しては、呉清源の回想録の記述(『以文会友』)と日置昌一の記述(「璽光尊とマッカーサー元師の物語」『文芸春秋』1952.10月号)の間に、1回目の出陣と2回目のそれとの内容が逆になっているなど、いくつかのくい違いがみられる。ここでは出陣に参加した当事者の証言を重視し、呉の回想録に即して記述した。

月20日には富士宮浅間神社まで各々本出陣が挙行された。浅間神社の参拝は、昭和天皇、皇太子を迎えての新皇居建設に備えての富士山浄祓の意味をもつものである¹⁾。なおこの後、昭和21年7～8月にかけては、月山、鎌倉、戸隠、青森、鹿島など、世直しを霊的に助ける働きをする神霊を璽宇に招くための出陣が頻繁に繰り返された。

しかし、こうした活動にもかかわらず、世直しのプログラムははかばかしい進展を見せなかった。璽宇内閣は有名無実なものに留まっていたし、璽宇村の建設のための資金調達も思うにまかせなかった。また、昭和天皇、皇太子への働きかけも効を奏さなかった。こうなると世直しの期待はいやがうえにも、マッカーサーをはじめとする「夷」の上に注がれる。昭和21年8月頃より、外国人への働きかけを指示する神示や、企てが目立つようになる。とりわけマッカーサーへの期待は大きく、璽宇内にキリストを祀り、それを通してマッカーサーに関する神示を受けるといったこともおこなわれた。また呉清源に命じて、占領軍中国代表団の朱將軍や大陸の世界紅卍字会道院への働きかけも試みられた。新しい神示には蒋介石やスターリンとの会見も構想されていた。「夷」への期待の高まりとともに、世直しの構想はしだいに世界化、普遍化の傾向を見せるようになったのである。

〔「金沢事件」の背景と影響〕

昭和21年11月30日、璽宇の一行は、あわただしく北陸金沢へと出立する。当時、東京を中心に天変地異が近づいているとの預言があったので、それを逃れるためという理由もあったが、より直接的には、11月末までに家を明渡しに欲しいとする家主の要求があったためである。当初、小金井の大井邸に居ることが検討されたが、大井家が最後になって受け入れを拒否したため、約束の移転期限ぎりぎりになっての金沢行きの決断（神示）であった。当時、金沢にはある程度璽宇の支持者はあったが、はっきりと落着き先の決らないままでの出発

1) このときの記録は、浅間神社にもこのこされている。それは渡辺雄雄『現代日本の宗教』大東出版社、1950、pp. 203-204 に採録されている。その際、璽宇一行は「天照皇大神、浅間神をして富嶽を祓はしめ、既に祓浄をして唯聖駕を以て迎へんのみ……」とするした奉書などを残していったとされている。

であった。こうして、いわゆる「金沢事件」の舞台となった金沢への遷宮がおこなわれることになった。

ところで、このあわただしい遷宮準備のさなかの11月27日の夜、後に「金沢事件」の誘因の一つともなった元横綱の双葉山が、呉清源に伴なわれて、ひょっこりと璽宇を訪れた。双葉山は11月19日に現役引退の披露相撲を終えたばかりであった。最後の地方巡行のとき、八戸在住の画家、七崎安太郎より璽宇を紹介されたのが、璽宇を知る最初のきっかけであった¹⁾。もともとときまじめで、精神主義的傾向が強く、敗戦のショックなどから動揺をきたしていた双葉山は、世直しと日本の再建を訴える七崎の話に少なからずひきつけられたようである。璽宇を訪れた双葉山は、最初の神前でのお参りに自ら激しい「接霊」状態を呈していたという。双葉山は遷宮にともない、一度自分の主宰する九州大宰府の道場にもどり、そこに妻子を残して、12月15日、単身金沢へ赴き、璽宇に合流することになる。

金沢では、一行はひとまず前多一郎邸に荷をおろしたが、ここは一行の滞在にはいささか手狭であったため、12月17日に松ヶ枝町の前多平作邸に遷宮した。金沢時代の璽宇は、全く未知の世界にとび込んだことからくる緊張感と、天変地異が迫ってくるとの緊迫感から、慢性的な霊的な昂揚状態を呈し、「神示に明け、神示に暮れる²⁾」たいへんあわただしい毎日を過した。「次から次へと御神示のままに、昼は天璽照妙の職を担いで、神社を始め、県庁や市の中央を浄祓し、夜は夜で、神璽の接霊によるお神楽舞い、死者（亡霊）の供養等で私的な余暇は全くなかった³⁾」ほどであった。呉清源は当時の生活を「朝は五時に起き、夜は床に就くのは午前一時過ぎで、睡眠時間は毎日四時間足らずであったから、床に入るとあっという間に死んだように寝込んでしまう毎日であった。一日のうち半分以上はお祈りで過し、あとは私の場合、参拝に来る人に法を説くのが主な仕事であった⁴⁾」と回想している。

1) 勝木徳次郎稿『璽宇と双葉山との関係』。

2) 勝木『同上稿』。

3) 勝木『同上稿』。

4) 呉清源『以文会友』白水社、1984、p. 143。

璽宇の来訪と活動は金沢の町でたちまち大きな反響を呼びおこした。その一つの要因は、天変地異の預言によるものであった。璽宇の金沢遷宮の少し前に福井大地震がおこったこともあり、璽宇の天変地異の預言は人々に強いインパクトを与えたのである。璽宇が居を構えた前多家には、次の地震はいつかといった問合せが相次ぐ状況となった¹⁾。さらにもう一つの要因は、双葉山がこれに加わり、白昼から呉清源らとともに「天璽照妙」を唱えて、町中を練り歩いたことに求められよう。名横綱として当時国民的な人気や敬愛の対象となっていた双葉山が、常識からすると異様とも見える姿で人々の前にあらわれたという事で、人々の関心はいやが上にも高まったのである。こうして、璽宇には先ゆきの不安から救いを求めてやってくる人、好奇心からひやかし半分にやってくる人、ニュースに格好の話題として取材に訪れる報道関係者たちなどが連日のように出入りするようになった。

やがてマスコミによる璽宇報道が開始され、それが全国紙にも掲載されることによって、璽宇（璽光尊）の存在はたちまち全国に知れ渡ることになった。マスコミの論調は全体として、天皇が人間宣言しているにもかかわらず、璽光尊を中心とした宗教国家を作ろうとしていること、双葉山や呉清源がすっかりこれに帰依している様子、天変地異への不安から、多くの供物を献上する信者の様子などを半ば揶揄的、半ば警戒的に報道するものであった。なかには地元『商工経済民報』（昭和22年1月1日発行）のように、璽宇の主張をそのまま紹介したものもあったが、これは発行人の明翫外次郎が、地元警察から璽宇の内偵を依頼され、璽宇の信用を得るために作った「提灯記事」であった²⁾。

このような社会的関心や、マスコミ報道の盛りあがりを受けて、かねてから璽宇の動静への注視を続けてきた警察が、いよいよその取締りに乗出してくる。ここで事件の経緯の概略を当時の新聞記事を中心に追跡してみよう。

まず、昭和22年1月18日には県警で取締りの方針が決定され、金沢玉川署の

1) 金沢測候所ではわざわざ天変地異が生じる可能性は極めて少ないといった声明も出している（『毎日新聞』昭和22年1月19日）。

2) 明翫外次郎「璽光尊、双葉山検挙事件のスパイ」『文芸春秋』1957.4、p. 78-85。

警察官が璽宇に乗込んで、幹部の身元調査や信者の持込物の調査がおこなわれた。その容疑は、「天皇」中心の世界の実現を唱えるなど、璽宇が占領軍の禁止していた日本による世界侵略を鼓舞する超国家主義的団体にあたると思われたこと、天変地異説による不安につけ込んで、それが信者から金品の献納を要求する欺疑行為をおこなっていると考えられたことである。警察は19日も璽宇皇居内の捜索を続けたが、璽光尊は面会を拒み、結局、彼女の取調べはできなかった。そこで警察は21日に璽光尊に玉川署への出頭を命じ、そこで秋元波留夫金沢医大教授に精神鑑定を求めることになった。しかし、21日に出頭したのは代理人の璽宇幹部・清水誠次と神巫の中原姉妹であり、彼らに対する聴取のみがおこなわれた。しかし、警察は璽光尊自身の出頭を強く求め、出頭しなければ検束すると強く指導した。そして、21日深夜、金沢脱出の準備がなされているとして、20数名の警察官により璽宇を急襲し、双葉山らと乱闘の末、璽光尊および幹部を検束した。

22日、警察の取調べの結果、璽光尊は生来の異常性格者に過ぎないと断定され、同日午後の秋元教授による精神鑑定でも、妄想性痴呆と診断された。そして協議の結果、狂暴性のものではなく、監視は必要ないと判断され、夜には釈放された。これに対し、中核幹部だった勝木徳次郎、清水誠次、西口正の三名は、実質的な指導者、「黒幕」として、詐欺、横領などの容疑で引き続き取調べを受け、1月30日に釈放された。他方、双葉山の方は検索された日の翌朝早く、双葉山奪還の目的で金沢にきていた朝日新聞社の藤井恒夫記者らに連れられ、湯湧谷温泉に隔離され、関係者の説得などにより、結局璽宇から離れることになった。

以上がいわゆる「金沢事件」の事実経過の概略である。この事件は、当初、断固とした当局の取締りの方針が出され、大掛りで強引な検束がおこなわれた割には、拘束した関係者を遅くとも1週間程で全員釈放するなど、大山鳴動して鼠一匹といった結果に終わっている。こうした事件経過の背景にはどのような事情があったのであろうか。この点に関しては、これまでおおよそ三つの説が提示されている。

第一の説は、GHQ 主導説と呼べるものである。この説はこの事件で警察のスパイ役を演じた明翫外次郎の回想のなかに示唆されている¹⁾。明翫氏の回想によると、当時の金沢警察署長より「占領軍も喧しいので、管内にいる以上、どうしても捨てて置けない」と、スパイの請託を受けたいと述べている。警察の背後に GHQ の意向が強く働いているととれる記述である。当時、GHQ は日本の民主化のために、信仰の自由の実現・保障を特に重視する政策をとっている。しかし、それは日本が侵略的超国家主義に走ったのは、信仰の自由が十分に保障されていなかったことがかなり影響していると考えられたためである。つまり信仰の自由の推進の政策は、超国家主義思想の解体という政策と密接にからみあっていたのである。したがって、信仰の自由とはいいいながらも、侵略的な超国家思想に対しては、GHQ はこれを取締るという方針で臨んだ。その結果、いくつかの宗教団体や政治結社が解散を命じられている。皮肉なことに、戦前・戦中期に異端的な天皇主義にあたるとして不敬罪などで弾圧を受けた宗教団体のいくつかは、戦後、今度は超国家主義的団体として嫌疑をうけたり（例えば、天理本道）あるいは解散を命じられたり（例えば、旧天津教）している。璽宇も天皇主義、皇道主義の用語を用いて、世界の世直しを主張しているという点で、GHQ からこうした嫌疑を受けることは十分にありうることである。

これに対し、日本警察主導説とも言える見方もある。これは璽宇の幹部、勝木徳次郎の説で、『璽宇と双葉山との関係』と題する回想記（原稿）の中で展開されているものである。それによると、「金沢事件」は「マッカーサー事件」以来、「官憲との間に醸された悪気流が一度に……爆発した」²⁾ものとされる。たしかに日本の警察をまんまと出し抜くマッカーサーへの直訴や、警察関係者への抗議、改心の訴えなど璽宇の行動には、警察の側からみると自分たちへの挑戦とみなされるような振舞いが少なくなかった。また実際、璽宇の振舞いに関し

-
- 1) 明翫外次郎「同前」ただし、この回想録は期日の記載にかなり誤りがみられるので、内容の信頼性にやや問題がある。梅原正紀「璽宇—ある天皇主義者の悲劇」（前掲）も、この文の影響を受けてか、この説をとっている。
 - 2) 勝木『前掲稿』。

て警察は、すでに東京時代からかなり神経質な警戒を示している。これに対し、マッカーサー（GHQ）の方は、璽宇の側からすると、直訴の書状を受けとるなど、むしろ理解者と受とれるような振舞いをしている。勝木説が日本警察主導説をとる背景には、こうした事情があったと考えられる。

さらに第三の説として、双葉山奪還説とでも名づけられる考え方がある。これは呉清源の回想録の中で述べられている見方で、要するに事件は双葉山の友人の朝日新聞の藤井記者が璽宇から双葉山を取りもどすために、警察に璽宇の取締りを依頼したことからおこったと解釈する立場である。呉清源ははっきりと事件の「真の目的は双葉山を璽光尊から引き離すことにあったことは間違いない」¹⁾と述べている。藤井記者が双葉山奪回のためにさまざまな運動をおこなったことは事実である。双葉山は当時、福岡県大宰府に双葉山道場という相撲道場を主宰しており、80人程の弟子を擁していた。しかし、双葉山が全てを棄てて璽光尊の下に走ったため、弟子たちは、いわば放り出されたかたちになった。困った関係者は双葉山の友人である藤井記者に相談を持ちかけ、その奪回を依頼したのである。そこで藤井記者は双葉山の友人として璽宇を訪れるとともに、朝日新聞に探訪記事を載せるなどして、マスコミの璽宇批判キャンペーンの一端を担った。そして事件の際には、いち早く警察に駆けつけて、検束された双葉山を温泉へ連れ出して、彼を璽宇の人々から隔離したのである。警察に留置された者を連れ出すといったことは、警察の了解なしになしうることではないので、この点に関して警察と藤井記者の間にある程度の了解が成立していたことは十分に想定されるところである。また、この事件が大捕物だった割に、ほとんど関係者の処分がなされず、結果として生じたのは、双葉山の引き離しだけであったことからしても、双葉山奪回説はそれなりの説得力をもつものである。それが「真の目的」であったというのは、いささか大胆な推論であるが、重要な要因の一つであったと推定することは許されよう。

これら三つの説は、全面的に排他的な関係に立つわけではない。この事件の背後には、これら三者各々の思惑がからまりあって働いていたとみるべきであ

1) 呉清源『前掲書』p. 145。

ろう。ただし、当時壘光尊の精神鑑定をおこなった秋元教授の証言と資料によると、この間の事情、特にGHQの意向に関しては、これまでの見方とやや異なる像を描くことができる。

秋元教授は、壘宇が金沢へ移転したかなりの早い時期から、GHQの金沢CICの隊長から壘宇調査を依頼されていた。彼は当初よりこれらを精神病理的現象ととらえ、専門の秋元教授に調査を依頼したものであった。このことから、少なくとも金沢のGHQではかなり早い時期から壘宇に関心を払っていたことがうかがわれる。調査は昭和21年12月27日より22年1月6日にわたって、秋元教授の指導を受けていた数人の学生らによっておこなわれた。調査報告書によると、この運動は「一箇の病的と推定される人物を中心として発生せる社会病理現象¹⁾」であるが、社会混乱期には、思慮ある人もこうしたものに動かされるおそれがあり、それを防止するためには中心人物の精神鑑定とその社会的公表が必要であるとしている。これは事件の前に提出された報告であるが、事件後の処理はまさしくそれに述べられた通りのしかたでなされている。また、秋元教授によると、このCICの隊長は日本の警察による検挙の動きに対して、強引なやり方は宗教弾圧につながるとして、むしろ抑えようとしたという。

これらのことを総合すると次のような推測が成り立つ。すなわち、壘宇を検挙するという方針については、むしろ日本の警察の方が積極的であり、GHQ側はどちらかという慎重な立場をとっていた。しかし、検挙後の処理をみれば、精神鑑定および、その結果の公表というかたちがとられており、GHQの意向が反映されているとみることができよう。ということは、日本の警察が検挙にむけて走り出したあと、どこかでGHQが、宗教弾圧という形になることを避けるべく、指導、介入をおこなったとみるべきではないだろうか。またこの間、双葉山の奪還を目ざすグループからも警察等へさまざまな働きがなされたであろう。大掛りで強引な検挙がなされながら、1日で壘光尊を釈放するといういささか不自然の結末に終わった背景にはこうした複雑な思惑の交錯があったのではあるまいか。

1) 秋元波留夫「狂信者「壘光尊」とその一団に関する調査報告」1947年1月。

ただ、結果として課せられた法的処分の軽さにもかかわらず、璽宇がこの検挙事件のなかで蒙った実質的なダメージはかなり大きかった。この検挙事件は連日マスコミに大きく報道され、しかも最後に璽光尊を精神病患者とする診断が大々的に公表されることで、社会一般に璽宇を異常な宗教、「邪教」とする見方が定着していったからである。「あの事件がすんでから『邪教がきた欺されるな、』、『璽光尊が来ても相手にするな、』と世間から白い眼で見られ、見知らぬ者から全くいわれのない投石を浴びたり、泥棒呼ばわりされたのであった」¹⁾ それに加え、世直しに大きな役割を演じると期待された双葉山が、大変強引な方法で奪い去られてしまったのである。法的統制に限定されない広い意味での社会統制という観点からすると、この間の経緯は璽宇への統制という点で、少くとも結果的には、非常に大きな効果をあげたことになる。

実際、このあとしばらくの間、璽宇はゆくさきざきで次々とトラブルに見舞われ、追いたてられるように各地を漂流することになる。璽宇はこのあと、昭和22年3月に、自宅を璽宇に提供していた前多平作が自宅と交換で新たに入手した家に移転した。ところがその家は既にGHQによる接収が決まっていた建物であった。前多はすっかり騙されたわけである。結局、5月20日に一行は警察に追い出されるようにそこを退去させられた。

その後再び東京に戻り、夏には山中湖畔の宣野家の別荘に寄留する。しかしここも年末に立ち退きを迫られ、今度は青森県の八戸に移転する（昭和23年1月）。八戸では信者で、造り酒屋を経営していた宮重が家を一軒購入し、璽宇に提供した。ところがここでもまた事件がおこる。宮重はしだいに璽宇の館の方に入りびたりになり、自宅にもどらなくなったため、家人や使用人が人を雇って宮重奪還の実力行使に出たのである。かくして屈強な男たちが璽宇の館に乱入し、乱闘事件となった（「八戸事件」）²⁾ また、八戸では警察の手入れも入っている。信者による脅迫の容疑、および三種の神器として短刀を所持しているという容疑によるものであるが、その信者は不在で、短刀を発見されなかった。

1) 勝木徳次郎『前掲稿』。

2) 呉清源『前掲書』pp. 152-3。

そのかわり精米が貯蔵されているのが見つかり、食管法違反の容疑による取調べがなされた¹⁾。これらのことが続き、八戸での滞在も困難になり、結局、東京に戻るのである。

この後も璽宇一行は各地を移動し続け、「金沢事件」以降、昭和25年に横浜市港北区帥岡町に到着く頃まで「どこでも迫害され、安穩、平静と思える日は一日とてなかった²⁾」といった状況が続いたのである。(未完)

(本稿の作成にあたっては、1990年度関西学院大学共同研究「日本思想における近代化と反近代」(研究代表者：黒田展之)に対し与えられた助成金の一部が利用されている。また、調査にあたっては勝木徳次郎氏、ならびに秋元波留夫氏より資料の閲覧、提供など多大な援助を受けた。あわせて謝意を表す次第である。)

1) 『東京タイムス』昭和23年3月5日。

2) 勝木『前掲稿』。